

共通教育フォーラム

福井大学共通教育センター(文京キャンパス)



巻頭エッセイ

わが教養主義時代の反省

教育地域科学部(社会系教育講座) 松浦 義則

『君たちはどう生きるか』(1937年)は吉野源三郎が今で言えば中高生に語った教養書であるが、自己の人格を形成し、自分で判断して生きていくことができるようになるためには、教養を身につけることが必要であることを教える本であった。特に大学で学ぶ学生は教養を身につけることが求められ、学生の多くがそれを当然のものと見なしていた。しかしこうした教養主義は1970年前後に没落したという(竹内洋『教養

主義の没落』2003年、中公新書)。したがって、教養をめぐる議論は世代が違えば話が噛み合わなくなるので、発言者がどのような時代と環境にあったのかを述べておく必要がある。

私は1964年(東京オリンピックの年)に地方の大学に入学したから、『教養主義の没落』直前の世代に属する。田舎の高校出身で、大学に入って始めて岩波新書を知ったくらいであるから、田舎者の劣等感を払拭すべく教養主義にあこがれ

た。当時は岩波文庫100冊の本というのが中野好夫・丸山眞男など錚々たる教養人によって教養を身につけるために読むべき本として選定されていた。田舎者はその権威を単純に信じて、その中のトマス・モアの『ユートピア』などを無理して読んだ記憶がある。この100冊外でもエラスムスやマルサスなども読んだ。正直いってどれもおもしろくはなかったが、教養は刻苦勉励して身につけるものという考えがあった。そう、教養は権威であり、規範であり、「強要」でもあった。

まもなくマルクスというおもしろい本にめぐりあえたので、私もご多分にもれずそれを中心に読むようになり、日本の古典や小説などをよむことは無駄であるというピューリタンの発想にとりつかれ、それまでの教養主義はあっさりと放棄してしまった。もともと権威主義的な底の浅い教養主義であったから、あらたな権威が現れるとそれに服従したのである。こうして70年の「大学紛争」を迎える。それは権威主義的な教養主義の権化と見られた大学教員に対する批判であったが、同時にその後の歴史が示しているようにマルクスの思想が学生たちのなかで、かつての栄光と権威を失っていく過程の出発点でもあった。こうした自分史からみても70年が教養主義の没落の画期であるというのは実感しうるように思う。

かつての教養主義は没落したが、それに代わるものはそう簡単には形成されてはいない。

このように言うのは、恥ずかしながら自分も短期間ではあれ権威主義的な底の浅い教養主義者であったことを告白し、そうでない求められる教養知とは何かを考えたいからである。それにはまず「学」と「知」の関係を考える必要がある。「学」には実学と基礎学（理学、具体的には文学部と理学部）があるが、それは専門知を中心とする。専門知には色々なものが含まれているが、技術知（日本史であれば古文書を読む能力）とその専門に関する深い知識であろう。そうすると教養知はそうした専門知とは領域を異にする知性や叡知ということになる。ここでの知性や智慧とは人間の知の構造や段階を情報（information）・知識（knowledge）・知性（intelligence）・叡知（wisdom）に区分したときの後者のふたつに相当する。勿論、専門知を基礎にしない教養知はないだろうし、大学4年間で簡単に知性や叡知が身につくとも考えられない。だから教養知は一生かけて身につけるものであり、大学時代はその方向付けをする期間と捉えるべきであろう。